

米国研修で感じた馬と人の関係

岡田スタッド 渡邊 薫

以前から海外競馬には強い興味を持っていた。連勝を重ねるスターホースたち、美しく着飾った人々が行き交うお祭りのような競馬場、そして何かにつけて言われる「日本競馬はもっと海外を見習うべき」といった決まり文句。私にとって海外競馬は、まったく別次元で起こっている出来事だった。

そこで私は、今回の海外研修で海外競馬を自分の目で確かめ、海外の進んだ感覚とやらを肌で感じ、持ち帰ってこようと思った。

まずレキシントンに滞在して感じたことは、馬文化の地域への密着性と、彼らがいかに馬を愛しているか、ということである。

訪れたケンタッキーホースパークでは、シガーやダホスといった過去の名馬の展示がひとつのショーとして成立していることに驚いた。これは馬を競走馬引退後も功労馬として大切に扱い、名馬として尊敬の念を呈していることの証明ではないだろうか。

この施設内や競馬場の土産物店で、馬や馬具をモチーフにした商品が多数売られていたのも微笑ましかった。ちなみに一番驚いたものは「ゼニヤッタの初仔」という子供向けの人形だ。これでいったいどうやって遊ぶのだろうという疑問が湧いたが、これも馬を愛しているからこそ作ったものなのだろう。

牧場視察では、広大で美しい牧場に思わず息を呑んだ。特にアデナスプリングスでは、まるで1枚の風景画の中に迷い込んだような錯覚に陥った。

おそらく厩舎作業を行う従業員以外に、清掃を専門に行う人がいるのだろう。確かに馬主や調教師が来場し、スタッフが馬を見せるという点では、牧場はある種の展示会場であり、もてなしの場所である。

日々の忙しさを理由に、どうしてもおざなりになってしまいがちな場内清掃だが、馬を最高の状態で展示し、できる限りのおもてなしをするためにも、場内清掃はとても重要であり、牧場作業の基本であることを私は改めて感じた。

調教に関しては、キーンランド競馬場で調教風景を少し見学することができたが、特に目新しいことは感じなかった。アメリカの競馬場は左回りしかないせいか、調教も常に左回りでキャンターを行い、右回りは速歩のみだと聞いた。それに比べたら、調教内容は日本のほうが多様性に富んでいて、なおかつ工夫を凝らしているように思える。

ただ、調教にもリードホースが付き添ってくれるのはありがたいと思った。日本でもひとつの牧場につき、何頭かのリードホースを取り入れられたら、調教中の雰囲気も変わってくるし、放馬などによる事故の軽減にも繋がるだろう。何より1歳馬やイレ込む馬に乗るときに危険な思いをしなくても済むに違いない。

さて肝心のブリーダーズカップ観戦だが、サンタアニタ競馬場の熱気と観客たちの高揚感にはとにかく圧倒された。この競馬の祭典が、アメリカ国民のハレの日として認識されているのは、やはり幼い頃から馬に親しみ、競馬をギャンブルとしての側面以外の観点から捉えているからであろう。

レースにもリードホースが付き添い、パドックから馬場へ抜ける馬道には、そのリードホースに跨ったライダーたちが和やかに談笑しながら待っている。スタート直後には、馬に乗ったりリポーターが競走馬たちを追いかけ、それを自動車が結構な速度で追走していく。日本ではあり得ないことの連続に、私はアメリカと日本の馬文化の違いを痛感した。

また、アメリカで女性ライダーが多数活躍していることは、同じ女性として心強く思い、励みになった。BCジュベナイルで優勝したシャンハイボビー号に騎乗していたのも女性騎手だった。私は、日本でもアメリカのように女性ライダーが活躍するのが当たり前になって、女性も安心して働けるような環境を整備して、何より女性への偏見の目がなくなるようにすることが競馬界、また馬産地の活性化に繋がるのではないかと思った。

このように書き連ねていくと、アメリカは長所だらけのように見えるが、私はレース前のパドックの周回数の少なさには不満を覚えた。おそらく、馬のストレスを軽減させたいがゆえに1周のみで切り上げるのだろうが、馬券購入のために馬を見たり、馬の写真を撮ったりしたい私からすると、非常に物足りなかったし、馬を尊重するあまり、観客の存在が無視されている印象を受けた。

私は今回の研修において、日本競馬には日本なりの良さがあり、海外諸国の技術や長所を上手に取り込んで発展していると思った。

しかし、馬に対する意識や馬文化への取り組み方には、まだ改善の余地がある。競馬人気を復興させるためには、競馬のギャンブル性以外の違った魅力を知り、それをいかに伝えるかというところにある。日本では、馬産地と競馬が切り離されて、馬券を買う楽しさは伝わっても、馬そのものの魅力は伝わっていないかのように見える。外国のように幼少の頃から馬に親しむ環境があれば良いのだが、日本でそのような環境を用意するのは難しい。馬の魅力を伝えるには、日常的な場所に興味を引くものを置いていけばいいと思う。パリスの舗道に埋め込まれていた名馬の蹄鉄なんかは、良いアイデアだと思った。

日本競馬は新しい技術よりも、馬を敬う心、愛する気持ち、そしてそれを具体化する方法を学ぶべきである。馬の存在そのものに目を向けずして、過去の名馬を大切にせずして、競馬は発展し得ないだろう。ちなみにケンタッキーホースパークで、過去の優勝レースが放映されるなか、シガーが登場すると、観客が大喜びしていたのがとても印象的だった。

最後に、私はこの研修に参加して、もっと馬のことを知りたい、もっと良い馬を作りたいと心から思えるようになった。これからも、この芽生えた好奇心や向上心を忘れることなく、日々の業務のなかで追求していきたい。そして、いつか、今度は働く側として再びアメリカに渡りたいと思った。